

# クセイノスといふギリシヤ語について

満田郁夫

『世界』十月號、「石原都知事批判」特集の中の姜尚中・内藤正典對談「蔓延する日本の排外主義」を新鮮な問題提起として讀んだ。その中で繰返される「ゼノフォビア」といふ片假名言葉について今は考へたい。

**内藤** オーストリアのハイダーは、失業問題を解決したわけでもなければ、經濟成長の望みをかなへたわけでもない。にもかかわらず、排外的な一言で支持を集めた。「戦争をしよう」と言つてもナンセンス扱ひされるでせうが、外國人を惡者にするといふのは非常に簡單で、一擧に世論はそちらのはうに傾いてしまふ。さういつた安易な擔保に外國人嫌ひが使はれることをどうしたら抑止できるか、それを私たちは考へなくてはならない。

**姜** フランスでルペンを中心とする國民戦線が勢力を擴大したところ「ぼくの隣人に手を出すな」といふワッペンを貼つて排外主義に對抗する運動があつたさうですね。強いゼノフォビアがある分、カウンターも強く出てくるし、ある種のホスピタリティがある。日本ではさうならないですね。

**姜** 丸山眞男は「開國」といふ論文で、幕末期、外側の夷狄と内側の庶民が内通するのを江戸幕府は最も恐れたと指摘してゐます。庶民といふのは最初から杓子定規にゼノフォビアに染まつてゐるわけではなくて、條件次第ではけつかう和氣藹々とやつてゐる場面もあるわけですね。

内藤 ゼノフォビアは、決して庶民がインテリカの問題ではありません。排外主義は、國家だらうが、大學だらうが、企業だらうが、そこに歸屬意識(ナシヨナリズム)を強めるときに必ず表出することを自覺しなければなりません。

内藤は別に「國民の間にある外國人に對する、潜在的な嫌惡感、のやうなものは、なくせと言つてもなくならないでせうし……」と言つてゐる。この今傍點を附した「外國人に對する潜在的な嫌惡感」もゼノフォビアの譯語なのであらう。そして、この四つの發言を受けて、編輯部が對談のタイトルの下、「陸上自衛隊練馬駐屯地の創隊記念式典で『外國人騷擾に治安出動を』と挨拶する石原都知事。四月九日、共同」の寫眞の下に、「石原都知事の『三國人』發言は、不況に喘ぐ日本社会に擴がる外國人嫌<sup>ゼノフォビア</sup>ひをあぶりだしてしまつた」云々の標語を附けた。これで全部である。

二人の間でゼノフォビアといふ語の使ひ方に差があるやうである。内藤は庶民の間に無意識的に浸透してゐるものとしてのそれを言つてゐるのに對して、姜は權力的なものが庶民をその中に意識的に導かうとしてゐるそれを言つてゐる。そして編輯部は内藤寄りにあの標語を書いたことになる。

「國民の間にある外國人に對する潜在的な嫌惡感」といふものがもともあつたか? ぼくは姜が言ふやうに「庶民といふのは……けつかつかう和氣藹々とやつて」來たのではないかと思ふ

のである。だが、その前に、ここで對談の雙方及び編輯部が當たり前として用ゐてゐるゼノフォビア *xenophobia* といふこの言葉は何だらう。用例が豊富であることが特徴のオックスフォード英語辭典に當つてみる、「外國人への深い反感」とある。そして一九〇九年から一九七六年までの八つの用例が出てゐる。 *xenophobic* といふ形容詞、 *xenophobically* といふ副詞、 *xenophobe* (外國人嫌いの人) といふ名詞も出てゐて、そこにも一九二二年から一九八三年までの十例が擧つてゐる。フランス語ではグゼノフォベ *xénophobe*、これは名詞でも形容詞でもある。ロベールの大辭典には一九〇三年の用例が一つ載る。ドイツ語はクセノフォビエ *Xenophobie*、グリムの大辭典には見出しもなく、ドワーテンの最新版 *Deutsches Wörterbuch* には一九八三年の用例が一つ出てゐる。反對語は *xenophilie*、こちらには英佛の辭書にも用例無し。要するに *xenophobia* といふ語は二十世紀になつてから造られた言葉だと知ることが出来る。とすれば、かといふ言葉はやたらに使はない方が好いのではないか、言葉が先行するといふこともある。

語源はギリシャ語のクセノス *κείνος* (ホメーロスではクセイノス *κείνος*) (遠くから來た人、客人) とポホペオー *φοβία* (動詞、恐れる) である。しかしそれを結びつけた *xenophobia* はギリシャ語にない。ピヒレオー *φιλέω* (動詞、好む) との合成語 *xenophilie* の方はギリシャ語の辭書にも出て居る。しかしあまり古い用法ではない。ギリシャ人は、段々に述べるが、外國

人をとても大事にした。だから *ἐπιφύλαξις* と *φοβή* とはたうてい結ぶつかないし、*φιλία* とだつて、殊更に結びつけて言ふ必要がないのである。なお、姜がゼノフォビアの反対語としてあるホスピタリティ *hospitality* は *hospes* といふラテン語から來た語で、「主」と「客」と兩方の意味を持つが、これについては別にローマ人の生活を考察しなければならぬ。

ギリシヤ人にとつてクセノス＝遠くから來た人＝客、といふ語は特別に重要な意味を持つてゐた。イーリアスには *ἐπιφύλαξις* の語は十二例、オデュッセイアには何と百十八例出て來る。こつちば漂泊の物語だから当然でもある。クセイニオス *Κεῖνος* 客の、といふ形容詞もある。イーリアスに一例、オデュッセイアに五例。クセイニア *Κεῖνια* 客への引出物、といふ名詞もある。イーリアスには二例、オデュッセイアには六例。クセイニドゾー *Κεῖνιδόζω* 客をもてなす、といふ動詞もある。イーリアスに四例、オデュッセイアに八例。これらの言葉なしにはイーリアスの物語もオデュッセイアの世界も成り立たないといふ重要な語群である。その一つ、イーリアス第三の歌の第三五四行目について、あるフランス人の註はこのやうに言つてゐる、

「客をもてなすことは神聖なことと見做された。旅人が到着すると、彼は家に招き入れられ、風呂で暖められ、御馳走でもてなされ、泊つて行くやうに引き留められた、食事の後、いや翌朝になつて始めて客人は名前を旅の目的を尋ねられた、滞在中、主は彼を家族として遇した、出發にさいしては贈物

が贈られた。以後この二人、客と主とは親密な絆で結ばれた、この縁は雙方の子々孫々にまで持ち越された。この義理を欠くことは贖聖行爲であつた。ゼウスその人が主を護つてゐたから。」

ゼウスは客をも護つてゐた、客の旅の目的は明かされるや、多くは即座に叶へられた。もてなされる客 *ἐπιφύλαξις* に對してもてなしの主 *ἐπιφύλαξις* クセイノドコスがある。こゝ第三の歌ではギリシヤ軍の十年に亘るトロイエー遠征の原因が、當事者であるメネラーオスによつて語られる。ギリシヤ軍の総大將アガムノーンの弟でありスパルテーの王メネラーオスは、かつて彼の許を訪れたトロイエー王プリアモスの息子アレクサンドロス（パリス）を客として遇した。ところが、アプフロディーテーに唆されたパリスはメネラーオスの妻ヘレーネーと手に手を取つて、財寶を船に積んでトロイエーに逃げ歸つた。このクセイノスのクセイノドコスへの裏切りに怒つたから、ギリシヤ人たちは十年間砂濱での野營に耐へてトロイエーを攻めるのである。三五―四行は一騎打ちの籤引きに勝つて最初にパリスが投げた槍がメネラーオスの楯に當つて碎けた後、順番で次に槍を投げる前のメネラーオスその人の祈りの言葉である、

「主なるゼウスよ、初めに私に惡をなした彼に報復なさしめ給へ、

神のやうなアレクサンドロスに、そして私の兩手の下で取り

拉がしめ給へ、

後に生まれた誰でもが戦慄するやうに

客をもてなした主に惡で報いることを、彼は心からもてなし

たものなのに。」

オデユツセイアの方からも例を擧げて置かう。十年経つてトロイエーを攻め落として歸國の途に就いたが、様々な苦難に遭遇して更に十年間彷徨を續けるイタハケー王オデユツセイアの息子テレーマコホスがここでの主人公である。彼は父の消息を求めて海を渡つてピュロス王ネストールの客になり、もてなしを受けた後、ネストールの末息子ペイストラトスに伴はれて戦車で荒野を越え、スパルテーに、メネラーオスの許に到着する。そこでは今や饗宴の酣である、娘をはアキヒルレウス生前の約束でミュルミドーンなるアキヒルレウスの息子の許に送りださうと、息子にはスパルテーから嫁を迎えようといふのだ。メネラーオスの従者の一人が遠來の客に氣附き中に入つて主に言ふ、

「どなたか二人の客人がここに居られます、ゼウスの育んだメ

ネラーオスよ、

二人の男が、大いなるゼウスの種に似てゐます。

言つて下さい、彼らのために迅い馬たちを解き放ちませうか、それとも他の人のところへ行くやうに送り出させようか、も

てなして呉れるような。」

すると彼に大いに怒つて言つた金髪のメネラーオスが、

「お前は馬鹿ではなかつた、ポエートホイデーのエテオーネ

ウスよ、

以前は、だが今は子供のやうに馬鹿なことを言ふ。

我々二人は心盡しの御馳走を散々食べたではないか

他の人々の御馳走をそしてここに歸つて來た、若しや一體ゼ

ウスが

以後は苦難を止め給ふかと、いや馬たちを解き放ちなさい

客人らの、そして御本人たちをはずつとお連れするのだ食卓

を樂しんでいただくやうに。」

(四 一六六—一七六)

オデユツセイアの十年よりは短い、メネラーオスもトロイエーからの歸途、八年間漂泊したのである。その間に立ち寄つた土地のリストがこの後第四の歌に出て來る、キュプロス・ポイニケー（フェニキア）・エジプト・エテヒオピア・シドーン（サイド）・エレムベ（？）・リビエー、その行く先々で我々は人々のクセイノスになり、「心盡しの御馳走を散々食べた」、そのお陰でここ懐かしい父祖の地に歸つて來ることが出來た、その間に兄のアガメノンがその妻クリュタイムネーストラの陰謀で殺されるといふこともあつたが、兎に角歸つて來ることが出來たのは、あの人々のお陰である。今や我々がクセイノドコスになつて、この二人のクセイノスをもてなす番で

ある。するとこの互助制度とも言へるクセイノスを大事にする考へかたは、ギリシヤに留まらず廣くアジアからアフリカにかけて存在した譯である。「他の人のところへ行くやうに送り出しませうか、もてなして呉れるやうな」といふやうなエテオーネウスの考へは飛んでもない、許しがたいことである。

メネラーオスに叱責されて、エテオーネウスは従者たちを連れて玄關先に急ぎ、汗まみれの二頭の馬を輓から解き放ち、飼葉桶のところに繋ぎ、スペルト小麦に白い大麦を混ぜて與へ、戦車を内壁に立掛けた。そして二人を家の中に案内した。奴婢女たちが（ピュロスではネストールの未婚美しいポリュカステーがテレーマコホスの風呂の世話をしたのだつた）よく磨かれた浴槽で二人の身體を洗ひオリヴ油を塗り、肩に濃い紫のマントクライマテと長着とを着せ懸けた。そして二人はメネラーオスの隣に座に着く。すると女召使が美しい金の水差しに手濯ぎ水を入れて持つて来て銀の水盤の上で彼らの手に濯ぎかける。そしてテーブルを擴げる。すると女中頭がパンを持つて来て脇に置き、更に澤山の御馳走を置いた。すると肉切り人が立ち上がつてあらゆる種類の肉の大皿を傍に置き、彼らの傍らに金の杯を置いた。するとメネラーオスが二人に挨拶して言ふ、「パンを存分に食べて下さいそして心楽しんで下さい。食事をお二人が食べ終つたらそれからお二人が人々の中のどなたなのかお訊ねしませう」。

かうした場面がイーリアスでもオデュッセイアでも繰返され

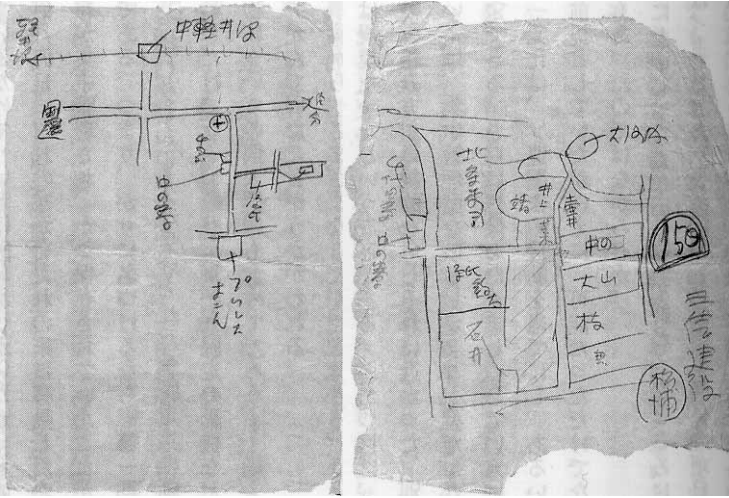
る。イーリアスではそれが基盤に沈んでゐるが、オデュッセイアではかうした場面の聯鎖がこの叙事詩であると言つてもいい程だ。クセイノスを大事にすることは、もう一度言ふと、古代ギリシアの、そしてホメーロスが指し示すところによると、廣汎なアジア・アフリカの風習であつた。今思ひ出すと、以前にサンスクリットを徳永宗雄さんに習つて、マハーバラータのナラ王とダマヤンティーとの戀物語を勉強した。ナラにはぐれて、森の中を彷徨ふ彼女に皆が親切であることが印象的であつた。あれは彼女が美しいからだけでなく、彼女が異邦人だからではないが。

日本ではどうか。異邦人・旅人を大事にする習慣は日本にもあつたと思ふ。柳田國男や折口信夫がそのことについて書いてゐる。折口はマレピトと言つた。柳田は折口のマレピトと言ふ考へに冷淡であつたやうだが旅・旅人については多くを書いた。彼は「峠に關する二三の考察」を書いた。

近くは脱走兵を援助する運動があつた。』となりに脱走兵がゐた時代 ジャテック、ある市民運動の記録』（一九九八年、思想の科學社）の五二九頁には一九六七・七一年に脱走兵が滞在した二七都道府縣の地圖が載つてゐる。ヴェトナムで人を殺すことを嫌つて脱走した米兵を助けて匿つた日本人がこんなに大勢ゐたことは日本人の心の誇りとなり得よう。その一人に中野重治があつた。この本には彼の手書の沓掛山莊地圖が入つてゐる。その地圖を彼は初めての時に彼らが迷はないやうに丁寧

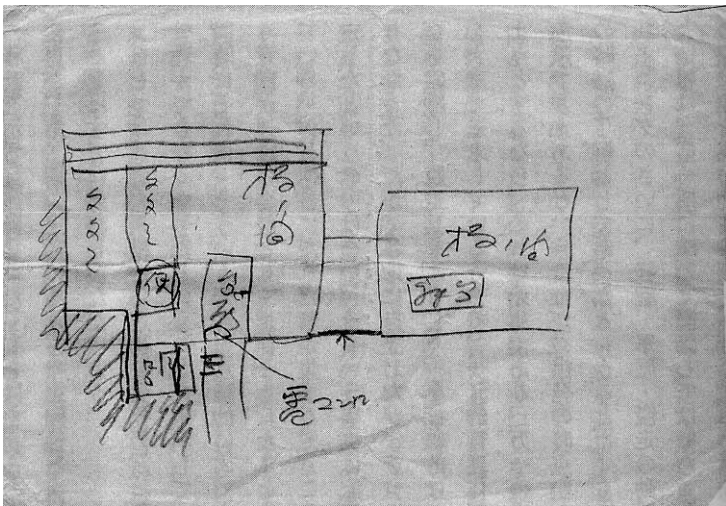
だ。

脱走兵援助運動のメンバーの一人である鶴見俊輔がこの運動



書いてジャ  
テックに渡  
し、その後  
も山荘が使  
はれること  
に自身か夫  
人の原泉か  
があらかじ  
め赴いて整  
理や準備を  
して細心の  
協力を惜し  
まなかつた。  
何よりも、  
彼は彼にと  
つて仕事の  
場であり休  
養の場であ  
る山荘を使  
ふのを暫く  
我慢したの

を覚悟しなければならぬ。この、鶴見俊輔が、小さな親切運  
動ならぬ大きな迷惑運動と呼んだ、異人を、しかし、實に多く



に携はつた  
ことをエネ  
ルギーにも  
して、一九  
七五年に  
『高野長英』  
を書いた。  
幕府の外國  
船打拂令を  
批判して牢  
に繋がる  
や、傳馬町  
の牢に放火  
させて脱獄  
し、顔を硝  
酸で焼いて  
人相を變へ  
て日本全國  
を逃げ歩く。  
匿つたもの  
は重い咎め

の庶民が助けるのである。鶴見は足で辿つてそれを確かめて行く。この本の第二九ページには、長英が隠れ住んだ地名を點で表した日本地圖が入つてゐるが、それはほくの頭の中での脱走兵の地圖と重なつて来る。人々が長英を匿つたのは、長英の人柄の良さもさることながら、日本庶民の間にもクセイノスを大事にする習慣があつたからではないか。ラフカディオ・ヘルンを大事にした松江の人々、ヴェンセスラオ・ジョゼ・デ・ソーザ・モラエスに親しんだ徳島の裏長屋の人々のことなども思ひ合はされる。かうしたことどもが我々の心の支へになる。

ここまで書いて來たとき、シャントレーヌのギリシャ語語源辭典に *échos* の記載があることを教へられた。「もともとの意味は、もてなしの相互關係によつて結ばれ贈物によつて固められた客と主との意、それは子孫をも結び得る」と彼は言ふ、そして「ホメーロスより後には、外國の、外國人の 意の形容詞になつた」と言ふ。

シャントレーヌが典據として擧げてゐるバンヴェニスト・イノド・ヨーロッパ諸制度の語彙』をも覗いて見る。二冊本のこの論文集の「第五章 奴隸、外國人」の末尾と「第七章 ホスピタリテ」とがこの問題に關はる。ホスピタリテの語源 *hospes* は *hospit-er* であると彼は言ふ。そしてその第一要素 *pet* はサンスクリットの *pati* であり、その他ギリシャ語・イラン語・リトワニア語・ヒッタイト語などを考察して、それは「主

人」「彼自身」であると言ふ。そして第一要素 *hospis* から、同じラテン語の動詞 *hospire* = *acquar* 贖ふ、均等化する をも考慮に入れ、マルセル・モースの論文「贈與論 交換の原初形態」で描寫したアメリカ北西部のインディアンの《ポトラッチ》の習慣などを考へ合はせて、「交換」といふことを導き出す。彼はイーリアス第六の歌中のグラウコスとディオメーデースとの挿話を引用する。二人は亂戦の中で遭遇して鬪ふべく名乗りを擧げて、互ひが父祖以來の盟友であることを發見する。

……すると雄叫び勇ましいディオメーデースは喜んだ。  
槍を豐饒なる大地に突き立てて置いて、  
それから彼は穩やかに兵士らの牧者に語りかけた。

「それでは君は僕の祖父以來の古い盟友だ。  
といふのはかつて神のやうなオイネウスは批の打ち所のない

ベルレロポホンテースを

引き留めて館で二十日間主まうけた、  
そこで彼らは互ひに贈り物を與へ合つた、

オイネウスは緋色に輝く帯を與へた、  
ベルレロポホンテースは金で出來た二重の杯を、

(中略)

従つて今や君にとつて僕はアルゴスの中で親しい盟友  
なのだ、リュキエーでなら君だ、僕が彼らの國に行かうなら。  
だから我らは戦さのどさくさの中でも槍をお互ひに控へるこ

とにしよ。

いくらでも僕にはトロイア人らと名高い援軍どもがあるのだ  
し、

君にも大勢のアカハイア人らがあるのだ、討ち取ることが出  
来るものなら。

そこで武器を互ひに取り換へよう、連中も

我らが祖父以来の盟友であることを誇つてゐることを知るや  
うに。」

(六二二—二三一)

敵味方に別れて戦つてゐる者同士といふ現實よりクセイノス  
の掟が優先するのだ。二人は戦車から跳び降りて腕を取り合つ  
て誓ふ。そして鎧を交換する。かつてのグラウコスグラーウコスの祖父ペル  
レロポホンテースとディオメーデースの祖父オイネウスとの金  
の杯と緋色の帯との交換による契約が、いまこの二人の金の鎧  
と青銅の鎧との交換によつて更新されるのだ。

ラテン語の *hostis* は「敵」といふ意味である。客(友)が敵  
なのだ。「これは、外國人は必ず敵であるといふ。そして、  
だから敵は必ず外國人であるといふ考へ方から出發しない限り  
理解出来ない。外で生れたものはア・プリオリに敵であり、彼  
と我との間に共同體そのものの内側では見られないやうな、  
客を大事にする關係を打ち建てるためにはお互ひの契約が必要  
とされるといふわけでいつもあるのだ。」